



# 日本平滑筋学会ニュースレター No 2

2009.06.01

発行所: 日本平滑筋学会事務局  
〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1  
東北大学病院胃腸外科内  
TEL:022-717-7205  
FAX:022-717-7209



## 第51回日本平滑筋学会総会開催が真近に迫る

### 7月21日から名古屋市で鈴木光会長（名古屋市立大学大学院細胞生理学）が開催

第51回日本平滑筋学会総会を平成21年7月21日（火曜日）～23日（木曜日）に名古屋市立大学医学部（郵便番号467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄1）において開催いたします。本総会の日程ならびに各予定行事の概要は以下の通りです。学術総会は7月22-23日に行い、特別講演1題、栗山熙賞受賞記念講演3題、一般口演38題、ポスター発表18題を予定しております。優秀演題賞に御応募されました21題の口演は7月22日に行っていただく予定です。また、本総会に引き続き国際シンポジウム“Post-genomic Advances in the Physiology of Smooth Muscle”を企画しております。皆様方には両研究集会にご参加下さいますよう御案内申し上げます。

#### ▷ 予定行事の概要:

7月21日（11:00～20:00）:名古屋国際センターにおいて、理事会、委員会等の会議開催を終日計画しており、学術講演などの予定はございません。評議員の先生方は評議員会（16:00-18:00）に御出席くださいますようお願いいたします。評議員会終了後に、中華料理店“東天紅”（名古屋国際センタービル25階）において評議員懇親会（会費:5,000円）を計画しております。

7月22日（8:55～21:00）:学術集会（於、名古屋市立大学病院ホール）

一般口演、ポスター発表、特別講演を行います。一般口演の一部では、優秀演題賞に応募された演題発表も行っていただき、審査を行います。優秀演題を発表した40歳未満の若手研究者5名（基礎2名、臨床2名、漢方関連演題1名）には賞（1件10万円を予定）が授与されます。特別講演はS.K. SARNA博士（Gastroenterology, University of Texas）による“Gene plasticity underlies smooth muscle dysfunction in motility disorders: cellular mechanisms to gene therapy”を計画しております。12:15～13:15には昼食を兼ねて総会を行います（弁当付き）。夕刻に名鉄グランドホテル（名古屋市中村区名駅1丁目2-4、電話 052-582-2218）において会員懇親会を行います。

7月23日（9:00～12:30）:学術集会（於、名古屋市立大学病院ホール）

一般口演、ポスター発表に引き続き栗山熙賞受賞講演を行います。平成20年に栗山熙賞を受賞されました勝井錬太先生（奈良県立医科大学）、田中俊昭先生（川崎医科大学）、H.S. Kim（金希善）先生（Yonsei University College of Medicine, Seoul, Korea）の御講演を計画しております。全ての学術行事が終了してから、優秀演題賞授賞式・閉会式をおこないます。

▷ 参加費 会員 3,000円 学生 1,500円（第2日目の総会開催時における昼食代を含む）

会員懇親会費 会員 7,000円 学生 3,000円

参加申込:参加申込書に必要事項を記入し、平成21年6月30日（火曜日）までにEメールに添付して、或は郵送にて、総会事務局に送付してください。また併せ、参加費・懇親会費等をゆうちょ銀行 口座番号 00870 -2- 169478 第51回日本平滑筋学会に振り込んでください。参加申込書は総会ホームページ（<http://www.soc.nii.ac.jp/jsmr/smr2009/>）からダウンロードできます。

事務局:名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄1（郵便番号467-8601）

名古屋市立大学大学院医学研究科細胞生理学教室

電話 052-853-8131 FAX 052-842-1538 Eメール:smr2009@med.nagoya-cu.ac.jp

## 日本平滑筋学会へ入会のお願い

日本平滑筋学会は50年以上の歴史がある日本医学会の所属学会です。本学会は平滑筋に関わる基礎・臨床研究の交流ができる専門性豊かな学会であり、会員は循環器、消化器、泌尿器、婦人科、生理学、薬理学をはじめ各分野から幅広く加入しております。機関誌は年9回発行されており、特に英文誌“JOURNAL OF SMOOTH MUSCLE RESEARCH”は“IF相当値”が3前後であり、国際的にもレベルの高いジャーナルとして評価されています。

学術集会では学会賞を設定し優秀発表を表彰しています。この領域に関心のある先生に積極的な参加を期待します。

## ▶ 会員メーリングリスト作成へのご協力を！:事務局メールアドレスを開設

会員の方のメーリングリストを整備いたします。これにより、より迅速で経費節約できる会員への情報伝達が可能になります。現在まで半数の会員のメールアドレスが登録されました。ご都合が悪い方以外の会員の方は是非ご協力ください。mail addressを事務局まで氏名、ご所属添えてE-mailでご連絡下さいますようお願いいたします。

事務局: 日本平滑筋学会 <[jsmr-adm@umin.ac.jp](mailto:jsmr-adm@umin.ac.jp)>

## リレーエッセイスタート!

奈良県立医科大学生理学第二講座 高木 都教授

ニュースレター第2号より新企画としてリレーエッセイをはじめます！若手からベテランまで広範囲の研究者に、自分の研究や平滑筋に係わりだした経緯などを含めて色々なことをエッセイとして書いていただきます。そして、リレーエッセイですので書いたヒトが責任を持って次の執筆者を推薦します。これでヒトとヒトのつながりが広がっていくことを願っています。

執筆者を若手に限るとすぐに払底するという広報委員の危惧から「若手からベテランまで」に書いていただくこととしましたが、考えてみるとこれまでの平滑筋研究はベテランといわれる方々が築いた礎の上に若手が育ってきているので、広範囲の研究者に当然執筆していただくべきであろうという結論に達しました。

そこで、年齢的にはベテランですが、いつまでも若手のつもりでいる「言い出し役」の私が、このコーナーのトップバッターを努めることになりました。ちなみに、推薦された方は、1600-2000字程度の原稿を理事長宛のメールで送っていただきます(別途連絡)。

(ここでやっと本文に入ります。)ト書き風？

私が日本平滑筋学会に入会したのは1973年(昭和48年)に岡山大学医学部第二生理学講座助手に採用されたときです。それ以来6年間の中断がありましたが、今日まで「継続は力なり」と考えて平滑筋の研究をしてきました。ただし、最近の約20年間は、循環器の研究と並行して行っていますので、二足のわらじを履いた状態でいささかしんどいときもありますが、幾分先に進んでいる循環器分野での研究成果を平滑筋分野の研究に生かし、また、その逆の場合もあり、マイナスをプラスに変える発想で楽しく研究を行っています。

このような私にとって一つのエポックメイキングなことが2008年8月3日にありました。これは、高野山で行われた排尿障害(排便障害も含む)を研究している、医師、看護師、理学療法士、作業療法士など様々な階層の医学・医療従事者の集まり(第50回NGB研究会;第13回高野山セミナー)で「排便反射機構-基礎から臨床へ」というテーマで特別講演をさせていただいたことです。

長年、基礎研究に携わってきましたが、臨床デビューはやっと2006年の第61回日本大腸肛門病学会総会での特別講演「排便反射における肛門機能温存と手術-基礎から臨床へ」でありましたので、臨床の方々との泊まりがけで、しかも畳の上でお話しして頂いたのは初めてでした。そして私が長年研究してきた排便反射は幸いなことに脊髄損傷でも腸壁内反射でおこりうるが(これを講演でお話しするとなかなかわかっていただけないようでしたが)、排尿障害はどうにもならないので、患者さんにとっては深刻であり、現場の看護師、理学療法士、作業療法士の方々が導尿等様々な苦勞をされていることをお聞きしました。脊髄損傷を直すには再生医療が一つの解決策として取り組まれておりES細胞、iPS細胞を使った研究が活発に行われています。私も、脊髄損傷による排尿障害をなおせる基礎研究を始めようと、無謀な挑戦であったかもしれませんが、今年度の科学研究費基盤Aを申請していましたが、残念ながら不採択でした。あきらめずにまた、申請するつもりです。

これまで行ってきた排便反射機構を解明する研究も重要ですが、神経再生の研究は、基礎研究としても神経の発生学を研究することにも繋がります。そして、なんと言ってもわくわくするのは、ただ、それだけに終わらず、神経再生を促進する、あるいは新しい神経細胞を神経幹細胞からつくり、排便反射の回復を促進する研究は、その成果の先に患者さんの笑顔を見ることもでき、言葉としてのみではなくトランスレーショナルリサーチを行っているという実感を持つことができることです。

私の部屋にずっと掲げている「同質は腐敗を呼び、異質は創造を生む」という言葉があります。これらのトランスレーショナルリサーチを行っていく上で、まさに異質は創造を生むということが重要であり、多くの方々との協力・共同によりブレークスルーする研究成果を挙げていくことができるのだと思います。異分野の方々との議論で目を開かれこともあり、お互いに学問的刺激を受け合いわくわくしながら研究ができることは、研究者としてとても幸せなことです。真性「若手」であった頃は知的好奇心こそが研究の源になっておりましたが、その先を見通すことまではできませんでした。今、「ベテラン」となり、研究成果の先を見通すことができるようになり、やっと胸をはって、「何のために誰のために研究をしているのか」という質問に答えられるような気がしています。